令和３年度まいぶん講座

因幡の中世城館

～天神山城跡と狗尸那城跡～

令和４年１月１５日
埋蔵文化財センター　大川泰広

- 中世の山城
- 1　県内の城の分布
  - ・県内の城館分布など
- 2　天神山城跡の調査・研究
  - （1）天神山城の復原的研究
  - （2）天神山城跡周辺の発掘調査
- 3　狗尸那城の発掘調査
- 4　天神山城跡と狗尸那城跡の検討

中世の山城

南北朝期から戦国末期まで作られ、軍事的な緊張状況から時代・立地・構造・居住といった機能にも違いがでてきます。

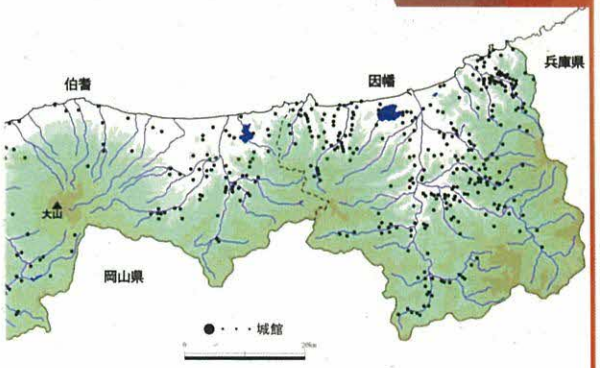
1　県内の城の分布

・県内の城館分布など

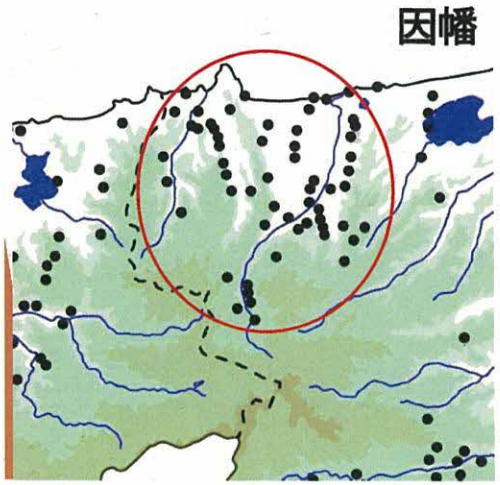
○因幡　292城　伯耆　212城　504城

○城館の密度（城館数／㎢）旧市町村単位

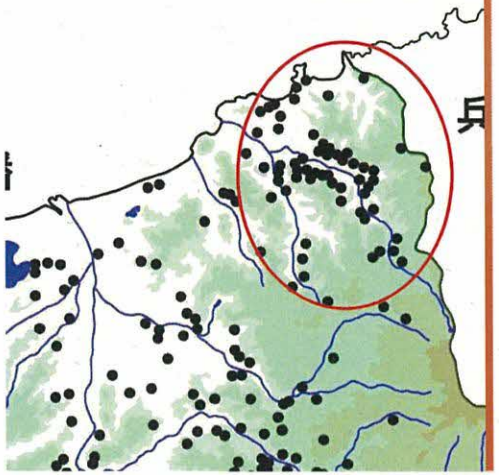
第１位　気高町・・・0.641
第２位　岩美町・・・0.490
第３位　郡家町・・・0.398
第４位　会見町・・・0.355
第５位　鹿野町・・・0.341



因幡・伯耆の境目　気多郡
（気高町・鹿野町・青谷町）・・・58



因幡・但馬の境目　巨濃郡
岩美町・・・60



2　天神山城跡の調査・研究

- 『因幡民談記』、『因幡誌』など・・・因幡守護所。
- 築城時期・・・不明。応仁の頃（1467年ころ）までには山名氏が城主。
- 廃城時期・・・永禄６（1563）年
  武田高信との争いにより山名氏が天神山を放棄し、鹿野に退去。
- 『寛文大図写』や『湖山邑地続全図』などにより周囲の田畑区画から堀について復元的研究。

（１）天神山城の復原的研究

「卯山は平安中期以来、天台系寺院の並び建つ宗教的中心地であり、布施はその門前町、商業地として栄えた集落であった。

参考・引用
「寛文大図写」、　中森祥2018「天神山城跡」『新鳥取県史　考古３　飛鳥・奈良時代以降』

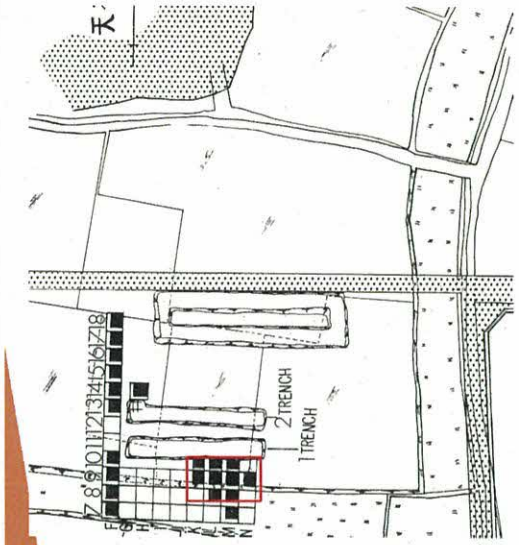
（２）天神山城跡周辺の発掘調査

鳥取農業高等学校（当時）の建設および改築に伴い、1972年、1988年に鳥取県教育委員会によって発掘調査が実施。

その他、鳥取市教育委員会によって、試掘調査が実施される。

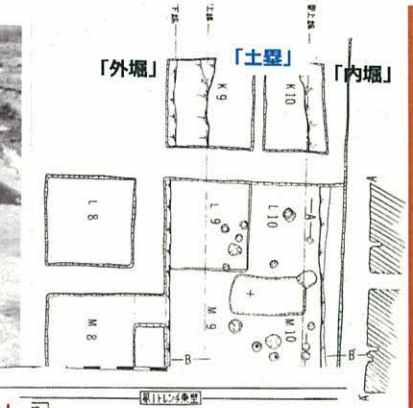
発掘調査では、戦国期（15世紀から16世紀前半頃）の遺物を中心とし、弥生時代から近世まで幅広い時期のものが出土。

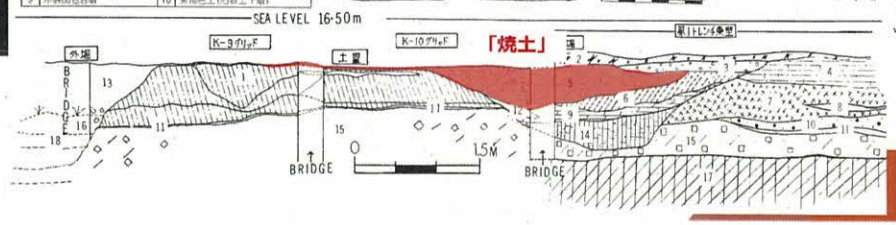
参考・引用　中森祥2018「天神山城跡」『新鳥取県史　考古３　飛鳥・奈良時代以降』

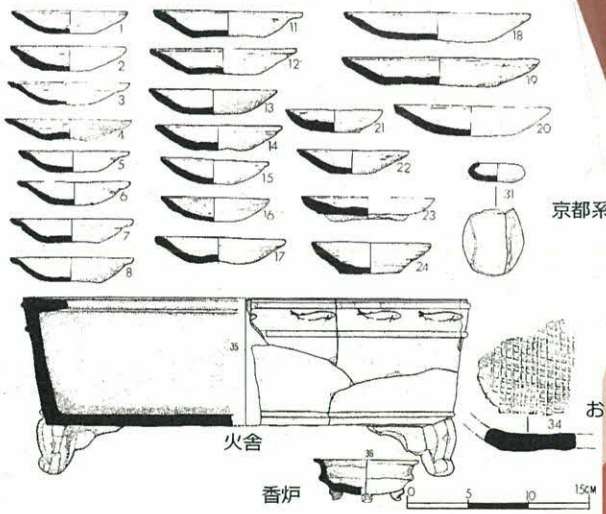


1972年度の調査

天神山丘陵部の南裾にあたり、堀と隣接する平地の調査で、「内堀」と「外堀」および堀に挟まれた「土塁」が検出されています。「内堀」から「土塁」上面にかけて焼土層が厚く堆積していて、この焼土層からは大量の土師器（京都系土師器皿など）や焼けた木片や礫などが見つかっています。「土塁」上面では柱穴が見つかっており、焼土層はここにあった建物の焼失、片付けに伴うものと考えられています。







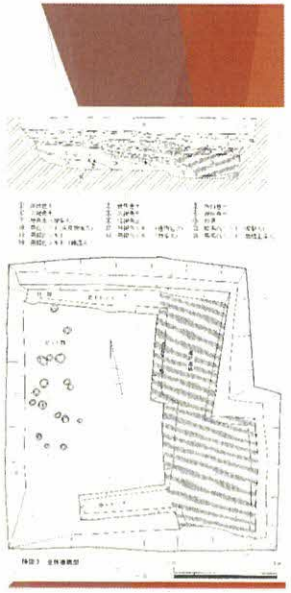
コラム<京都系土師器皿とは>

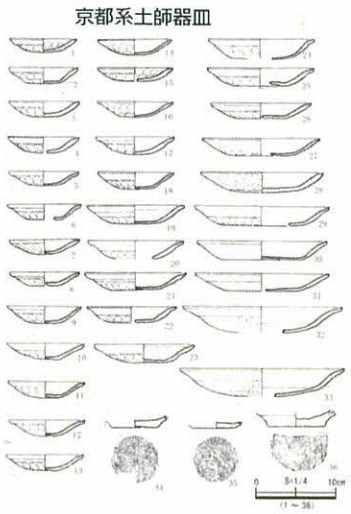
京都周辺でつくられ、京都で使用される土師器を模倣して、ろくろを使わない手づくねと呼ばれる技術で形を作り、篦（へら）で削って姿を整えた土師器皿です。大型、中型、小型など異なる大きさの皿を使う京都での飲食を伴う儀式に使われたとされています。

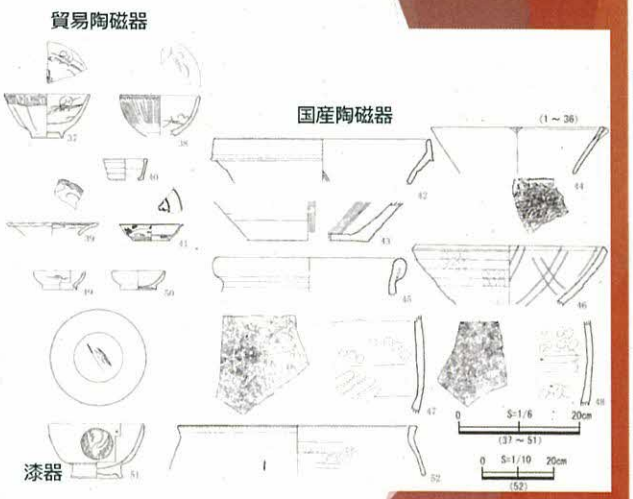
因幡の守護職を担った山名氏は在京していたこともあり、京都で行われていた武家の儀式を因幡に取り入れていたと考えらえます。その中で権威を表すものとして京都系土師器皿が使用されていました。京都系土師器皿は屋敷などで行われる宴会や儀式で一度に多量に使われ、捨てられたようです。

1988年度の調査

- 丘陵南東裾に近い平坦面を部分的に調査したもので、調査区の東側で南北方向に伸びる溝跡が確認されています。溝跡は堀に当たると考えられます。溝跡西側の平坦地でピット群（小さな穴）が見つかっていますが、規則的には並びませんでした。
- 溝跡内から土師器皿、須恵器、陶磁器、土錘、下駄、椀、箸などが出土しています。







出土遺物からみた天神山城跡

- 貿易陶磁器（青磁、染付（青花））から１５世紀中頃～１６世紀前半が遺跡の主体
- 多量の土師器皿出土・・・京都系土師器皿（手づくね技法によって作られた土師器皿）

- 国産陶磁器　備前焼の多寡による違い

  備前焼　少ない・・・独立丘陵部（天神山）の南から東側

  →中核となる施設があるところ

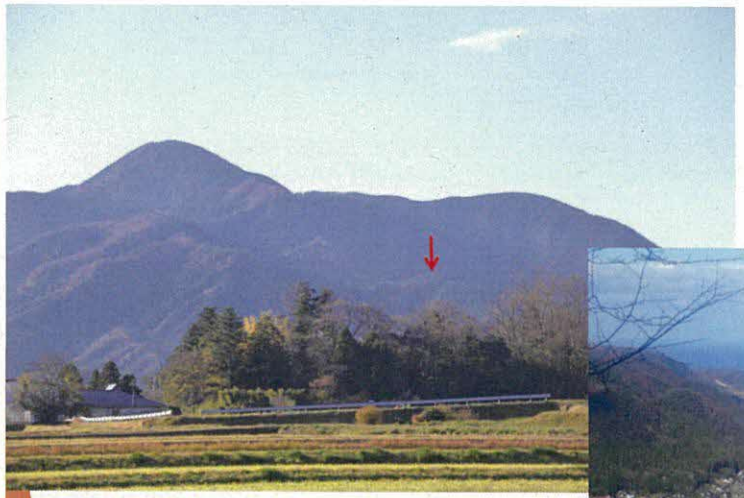
  備前焼　多い・・・・・独立丘陵部（天神山）の南から西側

  →湖山潟に面する船着き場の存在が想定される場

参考　中森祥2018「天神山城跡」『新鳥取県史　考古３　飛鳥・奈良時代以降』

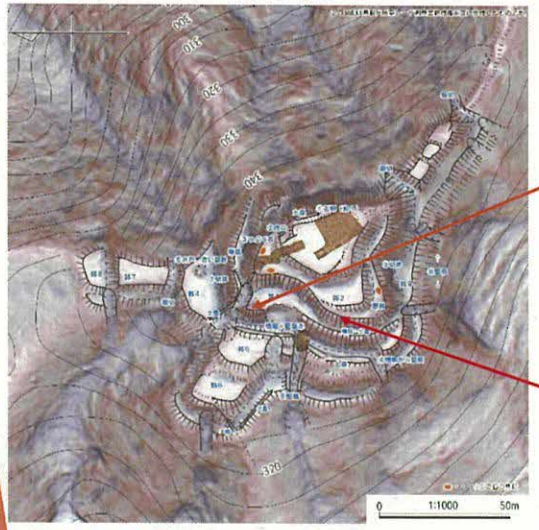
4　狗尸那城の発掘調査

約160×130m



狗戸那城の場所

狗戸那城跡からの眺望

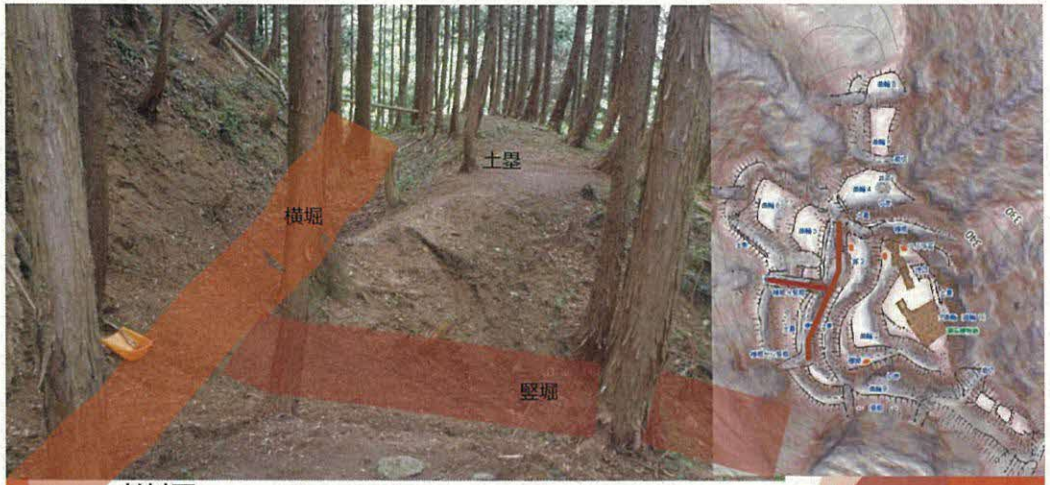


礎石建物跡

北西-南東方向に長い主郭（曲輪１）（長軸３０m、短軸２0m）の奥で、平坦面の幅いっぱいにつくられた大型の礎石建物跡（４間×５間３面庇）を確認しました。

８.１m×９.９m（庇は除く）　礎石は自然石で長辺約30～60㎝

スロープ（階



横堀・・・曲輪の周囲からの侵入を防ぐ堀
竪堀・・・斜面に縦方向に設置した堀

21

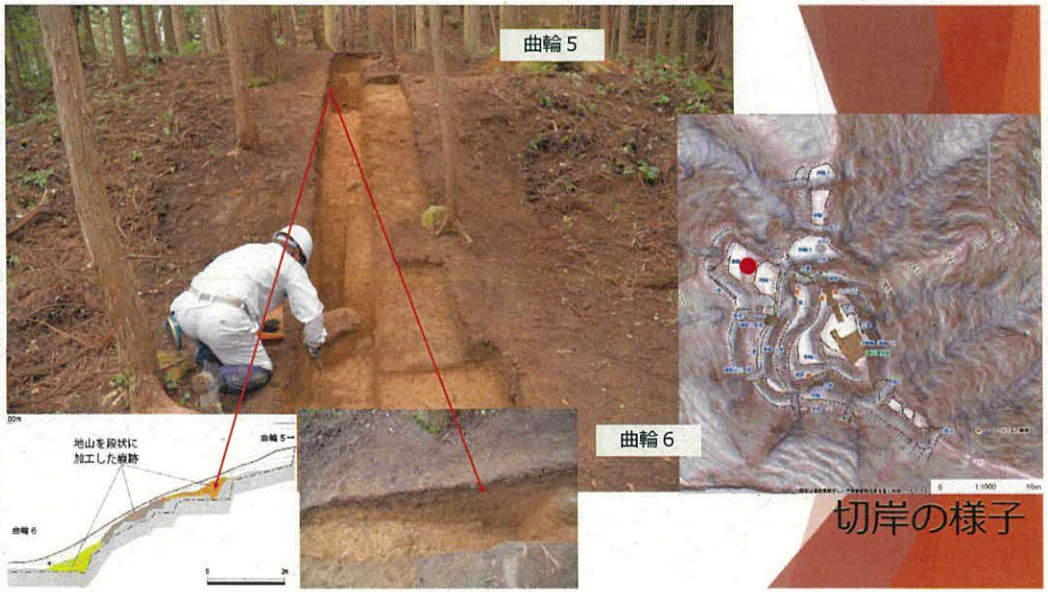
横堀・竪堀

竪堀・横堀

・高く急峻な壁
高さ10m越

切岸・・・人工的に切り下げた急斜面

23



切岸の様子

石積み

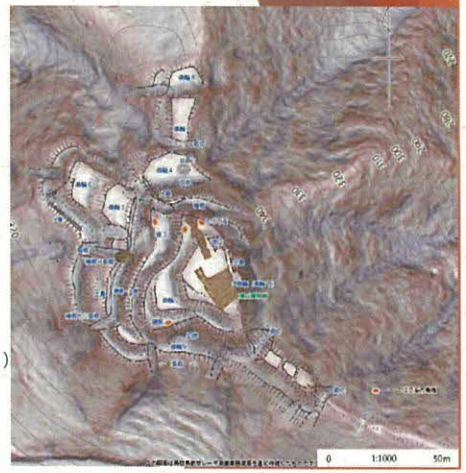
狗尸那城跡出土遺物

発掘調査の成果

・建物跡（５間×４間、３面庇）
　→　戦国大名や有力国人クラスの居住施設
・曲輪２、曲輪５～６の調査、改修痕跡を確認。
・曲輪１、２で礎石建物跡に伴う可能性がある石積みを確認。
・曲輪１～３で１５世紀末から１６世紀前半までの陶磁器出土。
・横堀と竪堀接続部　堀断面は逆台形（箱堀状：底面幅1.5m）

▶ **総括**

・竪堀を伴う横堀、因幡有数の技巧的城館
・構築段階案　　１段階　階段状の曲輪群
　　２段階　A　曲輪拡張、横堀、竪堀、土塁の構築
　　B　（礎石建物、石積み整備（スロープ虎口））
・戦国後期　但馬山名→毛利→亀井氏の勢力下で利用
・戦国時代の山城では 県内初の礎石建物跡



4　天神山城跡と狗尸那城跡の検討

＜毛利 対 但馬山名＞永禄６（1562）頃～

武田高信
毛利氏

対

尼子再興軍
但馬山名氏

中国地方大半を制した毛利氏が武田高信を支援。
因幡から但馬山名系因幡守護を排除。
尼子再興軍（但馬山名支援）による活動
※　永禄６（1563）年　山名氏が天神山から鹿野に退去
　　永禄７（1564）年　鹿野麓合戦（山名氏、鹿野から退去）
　　天正元（1573）年　鹿野古城再建

▶ <織田 対 毛利> 1576（天正4）頃～

毛利氏 対 織田氏（南条氏・亀井氏）

天正７年、因幡・東伯耆は決戦の一つの境目。

南条氏が毛利氏を離反。

→鹿野近隣では織田方の狗尸那城と羽衣石城の間に毛利方の荒神山城が入る構図

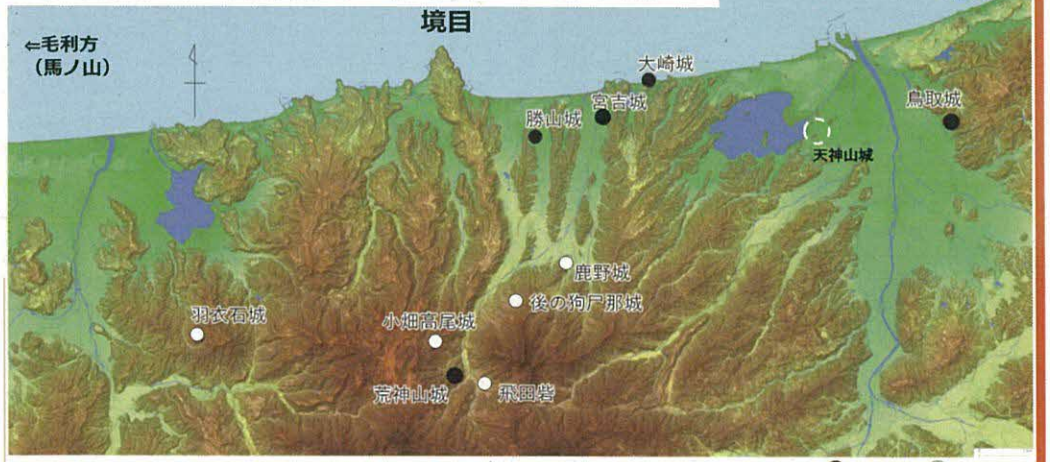
天正９年、最後は秀吉軍が制圧

▶ ※天正８・９年、秀吉軍による因幡攻め

▶ 天正９年、亀井茲矩が鹿野城主に

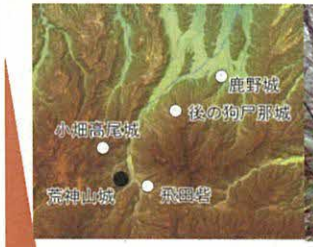
西　暦	主な出来事	天神山城跡	狗尸那城跡	現鹿野城	古文書「鹿野」
1400					
1450					
1467～1477	応仁・文明の乱	山名氏	遺物 土師器皿（回転台成形）		
1500		遺物 京都系土師器皿			
1550					
1563（永禄６）	天神山退去				
1564（永禄７）	鹿野麓合戦				
1569（永禄12）					城番：湯原元網
1570（元亀元）			改修（曲輪、切岸）		
（1572（元亀３）					（「鹿野新山」）
1573（天正元）			（礎石建物）		城番：野村信濃入道「鹿野取付」（杉原）盛重・南条「鹿野普請」
1580（天正８）	第１次因幡侵攻（織田軍）				城番：亀井茲矩 荒神山城（毛利方へ）
1581（天正９）	第２次因幡侵攻（織田軍）			鹿野城（王舎城）	

気多郡周辺の城館分布（天正９年６月頃）



鹿野城について

▶ 毛利方が因幡仕切りの城として再建か

▶ 天正８年、秀吉軍が攻略して亀井氏が在番

▶ 後に亀井公が近世城郭として改修